

日曜—mîr
月曜—mâkh
火曜—wunkhân
水曜—tîr
木曜—wurmazt
金曜—náklud
 nâkhid
土曜—kewân

と記されて居る、これを上の宿曜經以下の書に見て居る所と比較すれば、所謂胡名なるものは一見して此のソグド語の忠實なる音譯であることが明らかであつて、支那の佛典や曆書中にソグド地方の曆法の一部が記されて居るところを知り得ると共に、ソグド語の日曜日の名は今も尙ほ福建地方に行はるゝものであるとを了り得らるゝに至つた。

次には塞北の地にソグド文化の入り込むだ跡を尋ねると、彼の回鶻文字なるものが實にソグド文字から發達したものであり、従がつて蒙古滿洲字の如きも間接に此の文字から發達したものであると見得る如きは、これが好個の一例證とするに足る、此の事については既に大正三年史學會大會の講演中の一部に述べ、その筆記は同年五月の史學雜誌に見て居るから重ねては説かぬ、尤もこれについてはラドロフ博士は別に意見を有して居つて、一九一〇年にソグド字は反つてウイグル字から發達したものであらうといふ見解を發表して居るが (Kudatku Bilik, Teil II. p. 551. note I.)、此の如きは到底成立せぬ議論であつて、佛蘭西のゴーチオ氏 (R. Gauthiot) の如きも De l'alphabète sogdien の中に、之を以て甚だ信ず可らざる意見だとして居る。